

コンピュータ・ネットワークを活用した知的障害児の学習と支援 ～チャレンジキッズとの連携と県内ネットワークの構築をめざして～

島田勝浩

1. チャレンジキッズで学んだこととその発展をめざして

みなさんは、チャレンジキッズ*₁をご存知だろうか。

チャレンジキッズとは、平成8年度から「学びの共同体」として運営されている、障害児の学校間交流ネットワークである。本校は平成10年度から参加してきた。本研究では、チャレンジキッズに参加する中で学んだことを元に、さらに発展させた地域ネットワークを作ることをめざして取り組み始めた。

(1) チャレンジキッズの概要

チャレンジキッズでは、日常の生活の中で感じたことなどをやりとりするのはもちろん、作業学習の製品を売り買いしたり、参加校の地域差を生かした学習（例えばお雑煮の中身を調べて発表しあう活動）をしたりという様々な活動を展開している。ここに参加し、多くの人とかかわることを通して、ライバルを見つけたり、これまで経験したこともないようなことを知ったりして、自分の学校の中だけでは見つけられないような知的好奇心が刺激され、成長が促されるのではないかと考えている。

またチャレンジキッズでは、児童生徒の利用に際して担当校の教員が指導にあたっているが、その指導上のやりとり（打ち合わせや事後の評価など）を、教員専用の（児童生徒は見るできない）電子会議室で行っている。ちょうど授業は教室で行うが、打ち合わせ等は職員室で行うような感覚であり、図1で言えば「チャレンジキッズ」が児童生徒の教室、「Challenge」が教師専用の職員室である。

ここで使われているファーストクラス*₂という電子会議室システムは、必要に応じた利用者のグループ分けと、そのグループに応じた利用制限が比較的容易に設定できるシステムである。またGUI*₃での利用環境は直感的に操作しやすく、必要に応じて会議室を開くなどの際に音をつけたり、背景に親しみやすい絵を表示したりということも容易に行える。このシステムをうまく利用し、児童生徒が進んで参加したくなるような工夫を凝らしたり、利用者に応じ



図1 チャレンジキッズのデスクトップ画面

た参加制限を設けたりするなどして、効果的に運用されているのである。本校でも、現在このファーストクラスのサーバを所有しており、本校の児童生徒・教職員はこちらのサーバを経由してチャレンジキッズに入れる環境を整えている。

(2) 児童生徒の「学習の場」の拡がりを求めて

ところで、知的障害児の学習上における人とのかかわりというのは、とても限られたものではないだろうか。障害児学級では児童生徒と教師が1対1で学習をする場合もある。養護学校でもほとんどの場合同じ学部・学年での友だちや教師とのかかわりが中心であろう。本校では、過去の研究の中で「集団による学習」を取りあげ、かかわり合いの中で育つことに着目してきた。基本的に学校内のかかわりによるものであったが、集団の中で影響しあうことの効果については大きな収穫があったと捉えている。

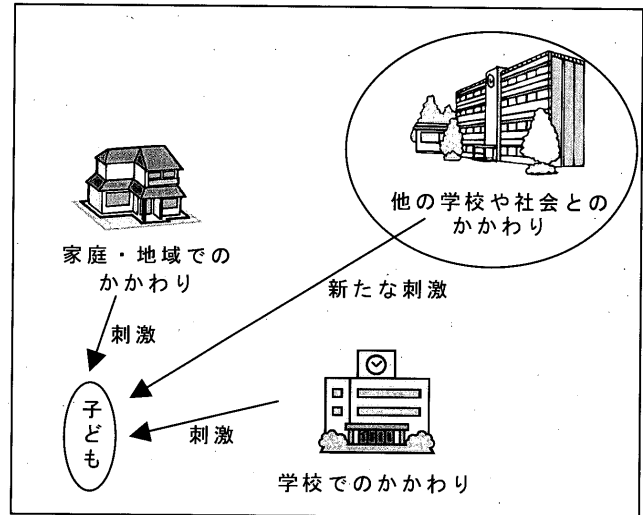


図2 かかわりの拡がりが新たな刺激を生む

ライバルという存在は、お互いに影響しあうことで時に非常に大きな育ちを促すことがある。知的障害を伴う児童生徒にとってもそれは同様であり、特に障害が軽度の児童生徒にはそういった刺激が成長に大きく作用することがある。しかし、影響を互いに与え合う存在にめぐり合える機会があるかどうかで、その方向性は大きく変わるのではないだろうかと感じている。

出合いを生むには、児童生徒の「学習の場」をいかに広げられるかが重要になる。そういった点から他校の児童生徒との交流も大いに必要であり、これまでも学校現場では様々なスタイルのものが実践されてきたと思うが、直接的な交流（時間と場所を合わせて一緒に活動をする形の交流）だけでは、できても年に数回程度になることが多く、なかなかお互いに影響しあう関係にまで高められないのが現状ではないだろうか。そこで間接的な交流（手紙などをやり取りするなどの交流）も効果的に絡めて行うということになるが、今回のシステムを活用することをその一つの方法として考えている（図2）。

(3) 支援者の効果的な連携をめざして

また、日々の児童生徒の学習活動を振り返ったとき、そこには必ず支援者の計画が存在する。学校では毎日のように指導者集団としての教員の打ち合わせが行われている。保護者のニーズも教育の方針を決定する上で重要である。進路支援や医療面での留意事項などには、それぞれの専門家の意見を要することもある。

こういった保護者や教員、進路支援関係者、医師など、障害児・者の支援に携わる人たちが、日常的に情報交換できるシステムを構築することで、多方面からの支援を受けながら児童生徒の日々の学習活動を展開できるのではないかと考えている。これらの連携は、面談や会議などの話し合いで行われるのが基本であろうが、そのやり取りを補完する意味で、あるいは効果的に記録し必要に応じて即座に参照できるという点で、ここにも今回のシステムを活用することが有効なのではないかと考えている。

2. 地域内でのネットワークづくりの必要性

チャレンジキッズは、利用者が限られているものの、全国規模のネットワークであるため、様々な人と出会い、お互いに学びあう機会を提供してくれる。しかし時には、もっと狭い範囲で交換したい情報（学校内で保護者と教員が交換したい情報、具体的な進路支援のこのような生活地域内でのみ交換したい情報など）もあるだろう。

本校では、チャレンジキッズと同じファーストクラスのサーバを導入していると先に述べたが、この本校側のサーバに独自の会議室を設定することで、用途に応じた様々な参加者が集うネットワークを構築できる。実際、チャレンジキッズに参加する学校の中で、独自にサーバを持ちローカルネットワークを構築しているところが6ヶ所^{※4}ある。

地域でのネットワークづくりは、扱う内容によるところもあるが、もうひとつ大きな意義がある。それは「実際に会うことができる（会いやすい）人との情報交換」である。

チャレンジキッズでは、各校の担当教員が年に数回程度、実際に会って研究会をもつなどの機会を作っている。当然のことながら全国から集まってくる以上、移動がかなりの長距離になる場合も多くある。児童生徒にとっては、修学旅行等の機会でも利用しない限り、全国的規模のネットワーク上でかかわっている人と実際に会うというのはかなり困難になる。その点、地域でのネットワークの場合は会える可能性は断然高くなる。第1項で述べたように、交流ということ考えた場合、間接的な交流だけでなく直接的な交流もできた方がお互いに影響しあう期待が高まる。実際に会えることで、いつもネットワークでやり取りしている相手のことがイメージしやすくなるということもあるだろう。地域で限定される話題というのも時にはあるかもしれない。

また、教員や支援者のかかわりにしても、現在の教育の動向や情勢、効果的な支援のあり方などについて全国的な交流の中でお互いに提供しあう場合もあれば、個に応じた具体的な支援に関してなど地域・関係者をさらに限定して議論したいものもある。近い学校同士で教材・教具の貸し借りをする連携などもこれから求めていきたいところである。

3. めざすネットワークの在り方

いま構築しようとしているネットワークには、児童生徒の利用、支援者の利用双方において、共通する理念がある。それは「誰かが中心になるものではなく、参加者みんなで作り上げる」ということである。具体的なサーバ管理やセキュリティーへの対応などには、サーバを管理するところが責任をもたざるを得ないが、利用の方針や内容については、参加者がお互いに、その都度必要なアイデアを出し、必要な相手を見つけて行おうというものである。

例えば、サーバが本校にあるからといって、そこに参加する全ての人が、本校の展開する実践のみに参加するということではなく、必要があれば、ある障害児学級とある県立の養護学校とのやりとりを、そのサーバを使って自由に行えばいい、ということである。もちろん最低限の利用規約等は設けるが、その範囲内であれば、自由な交流の場にしてもらいたいということである。

先のチャレンジキッズは、そういうかたちでこれまでも運営されてきており、これからもそのままであろう。場の提供はサーバ設置校が責任をもって行うが、利用についてはそれぞれが必要な内容で行う、そんな「共同の教室」として運営できれば、と考えている。

4. 具体的な取り組みとそこから見えた課題

近年 ADSL や FTTH*5 など、いわゆるブロードバンドの普及で、一般家庭でも安価で常時接続(定額固定接続といったほうが妥当かもしれない)できるインターネット環境が整ってきている。こういった状況で、たとえば保護者も加わった「ネットワーク上の教室」あるいは保護者と教師の「ネットワーク上の連絡・相談室」なども展開することができると思うが、そのために家庭でのインターネット利用に関する現状を把握する必要がある、保護者へのアンケートを実施した。この結果をふまえ、日頃の対話等を補足し家庭と学校がより連携して教育に取り組める環境をめざしていきたい。

一方、県内の各学校については、県特殊教育諸学校長会等を通じて、利用にむけた下準備にとりかかっていたが、ここでひとつ大きな壁にぶつかった。というのは、各学校が利用するネットワーク環境についてである。

現在、県立の特殊教育諸学校は原則として県スクールネットというシステムでインターネット利用をしている。このシステムでは、ISDN 回線でのダイアルアップという形で接続しているが、これは利用した分だけ電話代が発生するため、各学校の予算の範囲内では接続ができない、言い換えれば予算がなくなれば接続できない形になるということである。

また、セキュリティ上の問題ということで、ポート番号のことも大きな壁となっている。いま話題にしているファーストクラスというシステムが利用する通信ポート番号は、一般的にメールやウェブで利用するものとは違い、スクールネットでは現在利用できない状態に設定されているため、専用のソフトウェアを使った接続ができない状態にある。

ファーストクラスは一般的なウェブブラウザからの利用もできるが、第3項で述べたような GUI での利用をするには専用のソフトでの利用が必要となり、ウェブブラウザからの利用ではやや分かりにくい点が多いため、この問題の調整が、今後非常に大きなかぎとなると考えている。

* 1 チャレンジキッズ

滋賀大学教育学部附属養護学校にメインのサーバを置く障害児の「学びの共同体」としてのネットワークである。詳細については以下のチャレンジキッズ研究会のホームページを参照されたい。

<http://fyw.sue.shiga-u.ac.jp/cha-ken/index.html>

* 2 ファーストクラス

電子会議室システム。利用者には ID とパスワードによる認証が求められるため、セキュリティは確保しやすい。また独自のデザイン設計や利用者の所属グループによる利用制限などの設定がしやすく便利である。

詳細については以下の FC マネジメント社のホームページを参照されたい。

<http://www.fcm.co.jp/>

* 3 GUI (Graphical User Interface)

グラフィカル・ユーザ・インターフェイスの略。コンピュータのグラフィックス表示とマウスなどのポインティング・デバイスを用いた操作体系のこと。直感的に理解可能で、操作が容易である。

* 4 チャレンジキッズのローカル展開

現在チャレンジキッズのローカル版として、山形・東京・甲西(滋賀)・和歌山・愛媛・沖縄の6か所で、それぞれ特徴を出した地域展開がなされている。

* 5 ADSL や FTTH

ともにブロードバンドと呼ばれるインターネット用の接続回線。ADSL はこれまでの電話回線を利用した高速データ通信技術であり、FTTH は光ファイバーケーブルを用いた通信技術。このほか CATV (ケーブルテレビ) を利用した接続方法などもある。